

ミステリーの
愉しみ②

常盤遊戯

鮎川哲也
島田荘司
責任編集



ミステリーの
愉しみ①

奇想の森

鮎川哲也
島田荘司
責任編集

立風書房

ミステリーの愉しみ 第2巻

密室遊戯

一九九二年二月二十日 第一刷発行

編者 鮎川哲也／島田荘司

発行者 鎌倉 豊

発行所 立風書房

東京都品川区東五反田三六一一八

郵便番号 一四一

電話 〇三(三四四七)一一九一(代表)

振替 東京五七四四九三

印刷所 信毎書籍印刷株式会社

製本所 株式会社難波製本

© 1992 Tetsuya Ayukawa/Soji Shimada Printed in Japan

ISBN4-651-50272-5

落丁・乱丁本はお取替えません

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写（コピー）することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版社の権利の侵害となりますので、その場合には予め小社宛許諾を求めて下さい。

ミステリーの
愉しみ●の

密室 遊戯

目次

双葉十三郎	……「密室の魔術師」	7
水上幻一郎	……「青鬚の密室」	25
飛鳥高	……「犯罪の場」	43
天城一	……「明日のための犯罪」	69
杉山平一	……「星空」	89
六郷一	……「夜行列車」	95
香住春吾	……「カロリン海盆」	113
高木彬光	……「妖婦の宿」	157

藤村正太	「黄色の輪」	219
谿溪太郎	「東風荘の殺人」	257
藤雪夫	「アリバイ」	299
愛川純太郎	「木箱」	339
仁木悦子	「青い香炉」	385
戸板康二	「松王丸変死事件」	425
解説 鮎川哲也		457
著者プロフィール	山前謙	

装幀——菊地信義
装画——永畑風人

ミステリーの
愉しみ①の

密室 遊戯

双葉十三郎

ふたばじゅうざぶろう 明43(一九一〇)・10・9 東京高輪生れ。本名小川一彦。東京帝国大学経済学部卒業。住友本社勤務のかたわら映画評を書きつづけ、終戦後は退社して映画評論家に専念した。偏りのない評で知られ、映画評を集大成した「ぼくの採点表」が刊行中である。戦前に飯島正、植草甚一らとともにG・G(グレアム・グリーン)クラブを結成し、探偵小説やスリラーを愛読した。映画雑誌「スタア」に探偵小説を翻訳したこともある。戦後は江戸川乱歩の知己を得、海外ミステリーの情報を交換しあい、探偵作家クラブの会報に未訳書や探偵映画の紹介記事を寄稿した。創作は昭和二十二年の「くいーん」に発表した「試写室殺人事件」が最初で、二年ほどのあいだに数作発表しただけが、探偵小説の醍醐味は本格物にあるという自説にのっとった作品だった。昭和三十年から七年間つづいた、人気テレビ推理ドラマ「日真名氏飛び出す」の原案も手掛けている。

密
室
の
魔
術
師

ジ ケンオキタ スグ コイ ヤマムラ

シゴ トアリ トテモユカレヌ アシカラズ マチドリ

返電見た。まことに残念だが仕方ない。実はあまり奇妙な事件なので電報したのだが、目下のところ参考人としていつまた呼び出されるかわからぬので当地を離れられない。幸い上京する友人があるので、手紙を託して事件の輪郭だけでも報らしておく。

事件が起きたのは一昨夜つまり十月十四日の夜だが、発端はその前夜に溯る。一昨々夜つまり十三日の晩、町の演芸場に魔術がかかったので、僕は隣の別荘の谷崎家の人たちと一緒に見に行った。同勢は谷崎庄之助氏、甥の人丸五郎七君、静子、それに僕の四人。いささか照れ臭いのでまだ君には話してないが、静子は近く僕と結婚するはずの娘で、戦災で両親を失い谷崎家にひきとられた谷崎氏の遠縁。五郎七君は、子供るとき両親を失い谷崎家に入り、ゆくゆくは同家をつぶことになっているが、今度の戦争にとられ、この春満州から復員してきた青年である。

で、この四人で町へおりたわけだが、庄之助氏が酔っていたのが間違いのものになった。財界の利
け者たる氏については君のほうがよくご承知だろうが、十年前に夫人を失って今日まで独身。非常に
面白い性格を持っており、実に悪戯気たっぷり、奇術や謎々が非常に好き、暇さえあればその方面
の研究をしている。それはいいが、酔うと二重人格みたいになり、およそ人の悪い悪戯をする。これ
には僕も一度ならず悩まされたので、充分にきこし召しておられるときは敬遠策をとるようにしてい
たものだ。この晩もご機嫌と知ったら逃げるところだったが、静子に誘われて外へ出てみてからそれ
とわかったので、いまさらひつ込むわけにゆかず、ひやひやながらお伴することになった。

演芸場は相当に混んでいた。十三日から十五日まで町はお祭りで、十四日が日曜日にぶつかってお
り、海岸で花火大会があるというので、東京から温泉につかりながら花火でもみようという連中が、
どつと流れ込んで来た。演芸場にはそういった連中が詰めかけていたのだが、当の魔術は松風斎松月
一座という、あまり聞いたことのない名前だった。

谷崎氏は、いいご機嫌でかぶりつきに陣どつた。僕たちもその周囲に席をとつた。やがて幕があい
て、松月が現われたが、尾羽打ち枯らした、という形容はこの老人のためにつくられたのではないか
と思われるほど、惨めな姿だった。年の頃は五十五、六。額には苦勞の皺がふかく刻まれ、痩せこけ
た骨ばかりのような手は、食うや食わずのはかない旅まわりの生活を語っていた。が、あきれたこと
に、舞台上に現われた一座らしい者はこの老魔術師ひとりだった。ほかに助手として、時どき二人の若
者が現われたが、これは演芸場の若い衆である。つまり、この老魔術師ひとりの一座だったわけだ。
このお色気も何もない舞台では、最初から見物が馬鹿にしてかかるのも無理はなかった。そのうえ、
いけないのは、彼の態度がひどく傲慢なことだった。性狷介にして人と容れず、友人にも弟子にも見
放され、一人さびしく旅まわりをつづけている芸術家、といった感じが、僕にはびんと来た。が、そ
んなことは僕だけの感傷である。困ったのは、庄之助氏が奇術の知識を利用して、彼のその種明かし

を、いちいち僕たちにしゃべることだった。酔っているので自然と声も大きくなり、近くの席の人々にもきこえる、舞台の松月の耳にも届く、という始末なのだ。それがまたトリックの急所のところではしゃべるのだから、お客は笑う、松月はきつかけを失うというわけで、場内はしだいに嘲笑に満たされていった。松月はなんともいえぬ恐ろしい眼で谷崎氏を睨んだが、これが酔っている谷崎氏をさらに挑戦的な気分に煽り立てたのだらう。いよいよ最後の「悪魔の棺桶」とか称する魔術が始まり、一度ひっこんだ松月が、黒い頭巾に黒いマントという悪魔の装束でふたたび舞台に現われ、芸にかかろうとしたとき、僕たちがとめる間もなく、谷崎氏は大きな声でそのトリックを暴露した。トランクぬけと同じ簡単至極なトリックなのだが、庄之助氏の大声で松月がぎくりとなると、場内には哄笑が爆発した。なにしろ見物の大部分が、奇術などどうでもい遊山客なのだからたまらない。助手を勤めていた演芸場の二人の若い衆まで、お祭りで一杯やっていたのか、おどけた身ぶりで棺桶をひっくりかえし、二重底のからくりを暴いてみせる始末。もしこれが機転のきく芸人だったら、庄之助氏の暴露に調子をあわせ、魔術の種明かしをご覧に入れるということでもかえって見物を満足させる舞台をつくり出したかもしれない。が、松月にはその機転がなかった。彼は舞台の前方に立ちすくみ、からだをふるわせながら庄之助氏を睨みつけていたが、やがて、力つきたようによろよろとうめきながら舞台の袖へ消えていった。場内はさらに罵声と嘲笑の坩堝と化した。さすがの谷崎氏もすこしやりすぎたと思つたらしく、僕たちをうながすと、立ちかけた見物たちと小屋を出た。そして、僕たちはしばらくの間言葉も交わさず、別荘への坂道をのぼりはじめた。が、すこし行ったところで、ふいに谷崎氏は立ちどまると、

「すこし気の毒をしたナ。金でも届けてやろうか」と、独り言のようにつぶやいた。

「冗談じゃない。あんな高慢ちきないかさま手品師。いい気味ですよ」

五郎七君が乱暴な調子でこたえた。言葉はそれきりで、僕たちはふたたび黙りこくったまま、別荘

への道を迎った。

以上が十三日の夜の出来事である。翌十四日すなわち一昨夜は、町で花火大会があるというので、僕と母と隣の別荘の川田夫人の三人が谷崎氏の別荘へ行った。谷崎氏の別荘は、山の中腹の別荘地帯でももつともいい位置を占め、まさに眺望絶佳、町から海岸がひと眼で見おろせるので、花火見物にはもってこいなのである。

で、僕たち三人が谷崎邸についたのは、七時二十分だった。花火は七時半からの予定だった。谷崎邸には前に述べた庄之助氏、五郎七君、静子のほか、もう十三年も奉公している女中、というより家政婦といったほうがいいおはるさんという中年の女と、土地の娘で昨年から奉公しているきよという若い娘がいる。僕たちは、ホールへ入って、おはるさんが持ってきてくれたお茶などのんでいたが、庄之助氏は書斎、五郎七君は二階の自室にいますとかで姿をみせなかった。間もなく花火がはじまる時間が近づいたので、僕と静子は、まだホールのテーブルでおはるさんと話している母や川田夫人をのこして、ひと足さきに芝生へ出た。

あとで必要なので、ここに谷崎氏の別荘の大体の見取り図を描いておく。これは一階だけで、それもある必要部分だけを明示したにすぎないが、おはるさんや静子の部屋は北側にある。二階にも三室ほどあり、庄之助氏の寝室や五郎七君の自室は二階になっている。裏手には建物の外側についた階段がある。で、この見取り図に従って説明すると、僕と静子は、玄関を出て図書室のほうをまわり、松の樹の三、四間手前けんにあるベンチに腰をかけた。すこし話していると、裏手つまりヴェランダの西のほうから五郎七君がやってきた。彼が僕たちに加わるとほとんど同時に最初の花火が美しく夜空に散っていた。腕時計をみるとちょうど七時半だった。

「みんな、どうしたんだい」

「まだ話しているよ」

「小父さまお呼びしましょうよ。何してらっしゃるのかしら、ちょっとのぞいてみるわ」

静子は、ベンチを立って、松の樹のほうへ歩いてゆくと、その幹につかまって、柵の上へ登った。だいたい、このパンガロウ風な別荘は、山の中腹の斜面に建てられており、書斎のフランス窓の外にあるヴェランダは、芝生より八尺ほど高くなっている。芝生に立ったままでは、書斎のなかはのぞけない。ヴェランダの端から芝生のへりの松の樹までは約三十メートルぐらいだが、その柵へ登れば、書斎ものぞけるわけで、静子もそれを心得ていたのだ。

「危ないぜ」

「大丈夫よ」彼女は柵の上に立って、書斎のほうを眺めたが、とたん何をおどろいたのか、あっと叫んで、ヴェランダのほうを指さした。よほど驚いたらしく、指さすだけであとの言葉が出ない。僕もあわてて幹の反対側につかまり、柵へのぼって彼女の指のさす方を眺めた。

「あっ！ 魔術師！」

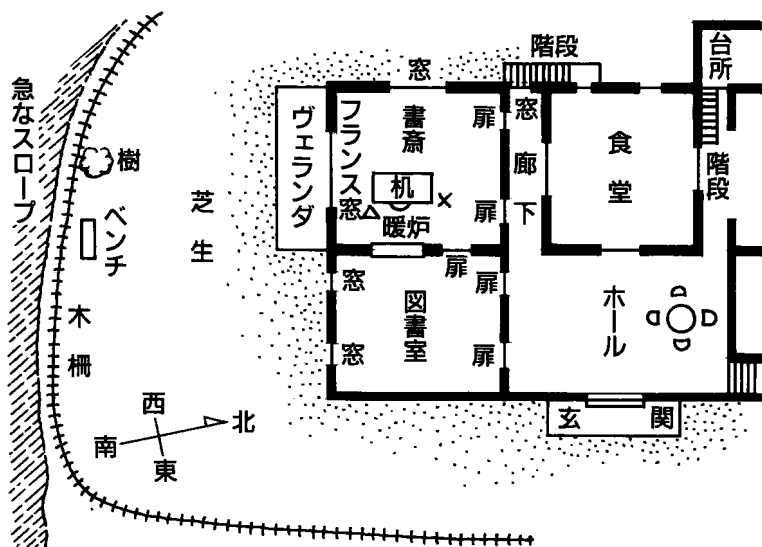
僕は思わず叫んだ。書斎の机のあたりに向こうむきによりかかった黒い頭巾と黒いマントの姿が、ガラス越しに見えた。書斎には電気スタンドだけついているらしく、それほど明るくはなかったが、机のしかかっているのは、見まごうべくもなく、昨夜演芸場でみた松風斎松月の悪魔の黒装束姿だ。った。

「なんだ！ なんだ！」

五郎七君もかけ寄ってきて幹にすがり、柵の上のびあがったが、

「畜生！ あいつだ！」と叫ぶや、芝生にとびおりて、

「みんな来い！」といいながら、ヴェランダへ向かって馳け出した。僕も静子も柵からとびおけると夢中になって彼のあとに続いた。が、ヴェランダの近くまで行った五郎七君は、そこから上がれないと気づいたのであろう、「ここからは駄目だ。なかから廻れ！」と怒鳴った。その声に、僕たちは方



向をかえ、図書室の下をとおって玄関からとび込んだ。ホールの右手にあるテーブルでは、母と川田夫人とおはるさんが話していたが、僕たちのただならぬ気配に、一斉に立ち上がった。

「魔術師だ。危ないから女は近寄るな！」

五郎七君は、そう母たちを制して、真っ先に書斎の廊下へ飛び込んだ。廊下は電気が消されていたが、ホールのあかりで薄明るくなっていた。五郎七君はまず手前の扉にとびつき、ハンドルをがちゃがちゃいわせたが、

「閉まっているぞ！」

と叫んだ。僕はそのときもう彼に追いついていたので、まだ懸命に扉をあけようとしている彼を通りぬけ、廊下の奥の窓に近いほうの扉にとびついた。が、これも鍵がかかっているとみて開かない。がたがたやっているとき、

「そっちも駄目か？」

「駄目だ！」

鸚鵡がえしにどなりかえすと、彼は扉をはなれてホールのほうへ小戻りし、図書室の扉をあけた。僕もつづいて図書室にとび込んだが、彼

はもう書斎との境の扉の把手を懸命にひねっているところだった。

「開かない。ぶつかれ！」

僕と彼は、一、二、三と呼吸を合わせて扉にぶつかった。が、びくともしない。

「駄目だ。フランス窓から入ろう。梯子は食堂の裏だ」

五郎七君はふたたび廊下へ走り込み、突き当たりの窓をあけると、そこから芝生へとびおりた。僕もつづいて飛びおり、すでに彼が手をかけていた食堂の裏手の壁ぎわに横たえられた梯子を一緒に担い、ヴェランダのほうへひきかえした。梯子がかかると、五郎七君は猿のように上っていった。僕もつづいてかけあがったが、上り切ってみると、五郎七君はフランス窓へ手をかけようともせず、茫然と立っていた。それもそのはず、つい先刻この眼で見ただけの魔術師の黒装束が、部屋のなかから掻き消すように消えていたのだ。

「逃げたのかな。それにしても芝生に人影がなかったし。伯父もいないぜ」

五郎七君はそう囁きながら、フランス窓をあけようとした。が、内部から掛け金がかかっていると見えて開かない。

「変だね」

彼はあたりを見廻して、植木鉢に気がつくのと、それを持ちあげ、窓の中央にぶつけた。ガラスがとびちると、彼はそこから手を入れて掛け金を外し、さっと窓をひらいた。そして僕たちは用心しながら、机の向こうへまわった。が、魔術師はそこにもひそんでいなかった。僕たちがみたのは、仰向けに仆れている谷崎庄之助氏の姿だった。苦悶に歪んだその顔に暖炉の炎がグロテスクな陰影をつくっていた。

五郎七君は腕ひじまわすいて呼吸をしらべていたが、

「駄目だ。頭をやられたんだな」とつぶやいた。僕はその言葉で、本能的に腕の時計をみた。針は七